



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	後悔でつむぐ繭 : Karen Russellの `Reeling for the Empire」と「逆回転」の戦略
Author(s)	石川, まりあ
Citation	研究論集, 15, 69(左)-80(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l69
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60545
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_005_ishikawa.pdf



後悔でつむぐ繭

— Karen Russell の “Reeling for the Empire” と 「逆回転」 の戦略

石 川 まりあ

要 旨

カレン・ラッセルの短篇 “Reeling for the Empire” (2013) は、歴史的事実とファンタジーの混じりあう、一種怪奇的な作品である。舞台は、殖産興業によって近代化を推し進める明治日本。官制の製糸工場に集められた貧しい少女たちは、帝国の斡旋人に騙されて奇妙なお茶を飲まされ、みずからの腹で絹糸を生産する蚕と人間の「あいのこ」に変身させられてしまう。設定の奇想性をおけば、その筋立て上は、工場に拘束され搾取されるヒロインが抵抗の道をみいだし、自由の獲得をめざすという、古典的な主題が目まぐるしくかもし出している。ただし、伝統的なフェミニズムの枠組みを援用しつつも、ラッセルは、「過去の選択」をめぐるより普遍的な問題を描きだしているのではないだろうか。自らの悲惨な境遇を決定づけてしまった労働契約の瞬間を悔み、自責に苦しむ主人公キツネの姿からは、取り返しのつかない過去といかに向きあって生きていくか、という根本的な主題が浮かび上がる。それを考える手がかりとなるのは、物語の中核をなす「糸繰り」(reeling) のモチーフに織りこまれた、過去—現在—未来の関係性である。女工たちが日々を費やす糸繰り作業の一方方向の回転運動は、時間の不可逆性とリンクし、二度と過去には戻れないという絶望を生む。しかし、この力学を通常の糸繰り作業ならば故障とみなされる「逆回転」へと反転させたとき、「間違った方向」であるはずのその現象こそが、過去との関係においては有効な生存戦略となる。キツネと仲間の女工たちは、糸繰りをつうじて、三つの過去との向きあい方を試行する——過去の一点をひたすら反復すること、動きを停止させること、そして、過去と現在とを往復するように絶えず動きつづけること。最終的にいきつくのは、新たな自分へと生まれ変わるため、過去に戻ることで前に進む、という特別な「糸繰り」のしかたである。

1. 序

あの選択は間違いだった——誰しも、一度はこんなふうに過去を悔んだことがあるだろう。まして、現在の苦境を引きよせてしまったある決定が、誰に強制されたわけでもなく、自ら望んで選びとってしまったもののだとしたら。カレン・ラッセルの短篇『Reeling for the Empire』（2013年、邦題「帝国のための糸繰り」）¹は、歴史的事実とファンタジーが混じりあう怪奇的な世界観²を展開しつつも、こうした過去を選択をめぐる普遍的な問題について考えさせてくれる。

舞台は、殖産興業によって近代化を推し進める明治日本。官制の製糸工場に集められた貧しい少女たちは、帝国の「斡旋人」に騙されて奇妙なお茶を飲まされ、みずからの腹で絹糸を生産する「蚕女工」に変身させられてしまう。設定の奇想性をおけば、その筋立て上は、工場に拘束され搾取されるヒロインが抵抗の道をみだし、自由の獲得をめざすという、古典的フェミニズムの「籠の鳥」の枠組みが目も惹くかもしれない³。もちろん、それはある程度、ラッセルの意図したところでもあるだろう。帝国の巨大な力に反旗を翻す主人公キツネの姿は、『女工哀史』などに残された歴史的事実をいわば語りなおし、富国強兵の裏で使い捨てられた少女たちを間接的に解放しているからだ。

しかし、フェミニズム的なモチーフ——家父長制的社会の犠牲となった女性が主体的選択を実現する——を引き継ぎながらも、この物語は、それらを包みこむ、より大きな問題を描きだそうとしているようにも思われる。自ら労働契約をまとめたキツネは、悲惨な境遇を決定づけてしまった自分の選択についての自責に苦しみ、未来に絶望する。意思の力ではどうにもならない「過去」の取り返しのつかなさ。主題となっているのは、そうした難問といかに向きあって生きていくか、という根本的な問題なのではないだろうか⁴。

それを考える手がかりとなるのは、物語の中核をなす「糸繰り」(reeling)のモチーフに暗示された、過去—現在—未来の関係性であろう。女工たちが日々を費やす糸繰り作業が基本とする回転運動は、時間の不可逆性とリンクしている。体内から勝手に流れた糸、それを巻きとる糸繰り機、リールなどのイメージにより、ひたすら一方方向の運動に重ねられた時間は、二度と過去には戻れない絶望を映しだす。しかし、こうした力学を、通常の糸繰り作業ならば「故障」とみなされる「逆回転」へと反転させたとき、「間違った方向」であるはずのその現象こそが、過去との関係においては有効な生存戦略となる。キツネと仲間の女工たちは、糸繰りをめぐる選択をつうじ、三通りの過去との向きあいかたを試行している——過去の一点をひたすら反復すること、動きを停止すること、そして、過去と現在とを往復するように絶えず動きつづけること。彼らが最終的にいきつくのは、時間の動きに抗うのでも、ただ無抵抗に時間に流されるのでもなく、意思と本能を縊りあわせ、過去に戻ることで前に進む、という特別な「糸繰り」のしかたである。

2. 記憶の糸繰り

作品中、糸繰り作業は、工場において女工たちの生活を支配する機械的な運動のメタファーとして登場している。人間と蚕の「一種のあいのこ」(Some kind of hybrid creature 24)として、未知の変態「蚕変化」(The *kaiko-change* 29)を遂げ、腹のなかで規則正しく糸を生産し続けるみずからの身体。その糸を巻き取る、“the Machine”(27)と呼ばれる最新鋭の糸繰機。“*Kaiko-joko*”(26)たちを突き動かし、その生を繰る糸の流れと、刻一刻と進む蚕への変身は、自分が自分でなくなってしまうという根本的な恐怖とも結びついている——“Who are you? What’s happened to you? What is this place?”(24)。ここでは、自分の正体を基礎づけるはずの過去すら、蚕化する容姿が互いに似てくるという「匿名性」(the new anonymity 23)に脅かされる。実際、素姓を証明できなくなるにつれ、娘たちは出身をねつ造しはじめるのである(And more our *kaiko-bodies* begins to resemble one another, the more frantically each factory girl works to reinvent her past 23)。無名の境遇がもともと姉妹のように似ていた少女たち(we were sisters already 25)にとって、それは、嘘のヴィヴィッドさが、出身地や階級の整合性などよりも大切な、自分がかつて人間だったという事実を浮き彫りにしてくれることを願うからにちがいない。

だが皮肉なことに、元来の姿を証する努力は、語りの変奏によって身体の変化と連動してしまう。祖父について幾通りもの嘘を語るキツネのように。日々内容の変化を指摘されると、キツネは言う——「昨日はそうだったの」“Yes. He was, yesterday”(24)。つい昨日とも一致しない、むしろ、一致しようのない過去語りは、現在を支配するグロテスクな変身のバリエーションなのである。だから、それに抗うように、過去を脚色するいっぽうで、彼らはかつての痕跡を呼び出そうと記憶にしがみつく。一日たった十五分の貴重な休憩時間を費やして、故郷やなじみの食べ物、家族を思いうかべ、糸を逆向きに巻き取るように、過去をたぐり寄せるのである(Stubbornly we reel backward 33)。

しかし、この記憶のなかでのみ自由に操れる「糸繰り」作業は、かえって、現実における時間の不可逆性をも浮き彫りにしている。「人間絹糸工場」(fleshy silk factory 37)と化したおぞましい身体と、工場での奴隷生活を生みだしたのもまた、過去の一瞬——労働契約の成立とともに毒の茶を飲まれた茶席(the *kaiko-tea ceremony* 35)——だからだ。誰もが、その決定的な場面を取り消し、時間を巻き戻したいと願う——“But we can’t undo it? Surely there’s a cure. A way to reverse it, before it’s... too late.”(29)。だが、もちろんそれは不可能だ。

とりわけ、キツネの場合、記憶の糸さえ、自分では制御しえない苦しみ の源泉となっている。過去は、囚われの現在を呼び寄せた自らの責任を象徴してもいるからだ。保護者の手で奉公に出された仲間たちとは対照的に、キツネは、病床の父に代わって署名を偽造し、自らの判断で「斡旋人」(the factory Recruitment Agent 26)との契約を取りつけたのだった。

I had never used an ink pen before. In my life as a daughter and a sister, I had never felt so powerful. No woman in Gifu had ever brokered such a deal on her own. KITSUNE TAJIMA, I wrote in the slot for the future worker's name, my heart pounding in my ears. (35)

自らの名を、自らの意思で、自らの手で署名すること——初めての、そしてたった一度の、重大な自己決定権の行使。貧しい小娘が、帝国の代理人たる幹旋人に指図までする強気の姿勢で (He said he wasn't used to being bossed by a *joko*. 35)、家長に代わって帝国への貢献を果たす。キツネにとって、それは自由と力をつかみとった、誇らしい瞬間に思われたはずだ。女工たちのなかでただ一人、率先して猛毒の茶を飲み干してしまったのも (36)、その感覚を全うするためだったのだろう。

ところが、その選択があやまちだったと判明したとき、自己決定の事実がかえって自分を責め立てることになる (“I chose this fate. I can't blame a greedy uncle, a gullible father. I drank the tea of my own free will.” 42)。キツネは、幹旋人に抗った他の女工たちの “initiation story” (37) を、それによって守った無垢さの証拠をうらやみ (a proof of their innocence 37)、自分を怪物のように思う。しかも、キツネが “I can't stop reliving it.” (38) と語るとおり、苦々しい記憶は意思のコントロールがきかず、「機械的に」再生される。

... this memory reassembles itself in me mechanically, just as the thread swells in our new bodies. It's nothing I control. I see the Agent arrive; my hand trembling; the ink lacing my name across the contract. My regret: I know I'll never get to the bottom of it. I'll never escape either place, Nowhere Mill or Gifu. Every night, the cup refills in my mind. (42)。

毎晩記憶のなかで満たされる茶席の茶碗 (the cup) のように、キツネは契約の場面という過去の一点へと否応なしに引き戻されてしまう。女工仲間のダイの表現を借りるなら、「ひとつの繭を永遠に」、しかも「間違った方向に巻きとる」(41) 堂々巡りのなかに囚われているのである。

3. 過去からの継承

しかし、すべての責任を自分に課してしまうかぎり、一度は得た力を生かすどころか、逆に自らを縛りつけている構造にからめとられてしまうのではないだろうか。キツネが気づくべきは、自分がすべてを決めたと思っているその選択もまた、「継承」という抗いがたい作用に突き動かされていたことだ。そもそも、キツネの現在は、前の世代から受け継いだ負の遺産によっ

て定められていた。明治維新によって小作農へと身を落とし、農民一揆にくわったあげく、最終的にみずから命を絶った祖父が遺した、借金だ。

... he set fire to the creditor's offices where his debts were recorded. After the rebellion failed, he hanged himself in our barn. The gesture was meaningless. The debt still existed, of course.

My father inherited the debts of his father.

There was no dowry for me. (34)

祖父から父へ、そしてキツネへ。背後に控える者から受け渡されたマイナスの遺産が、工場での奉公を決意させ、斡旋人との契約へとうながしたのだとすれば、「自由意思」でおこなったはずの署名は、むしろ期せずして、父の無力に、祖父の負債に、そして歴史の流れという連鎖に自らを連ねることでもあったにちがいない⁵。

その一連の作用は、勝手に回りつづける機械の歯車のように、時代を変え、人を変えても、ゆっくりと前へと動きつづける。祖父は死によって負債から逃れたが、その重責は息子であるキツネの父の世代に引き継がれてしまった (The gesture [suicide] was meaningless. The debt still existed, of course. My father inherited the debts of his father. 34)。そして、働けない父の代理として債務をその身に引きうけたキツネ本人も、殖産興業に貢献することにより、帝国に拘束される身でありながら、自ら帝国の力を補強する、という構造にはまってしまう。これが、女工たちの“*kaiko-body*”を支配する糸の動きにも似た、逃れがたいメカニズムなのだ。

しかし、現在が過去との、前世代との継承関係に方向づけられているのだとすれば、祖父のように死を選ぶ以外に、キツネが苦境から逃れるすべはないのだろうか。それは、先人たちから何を引き継ぐか、という過去からの選択の問題であるように思われる。物語の転換点となる、女工仲間のダイのハンガーストライキは、侍として反乱にくわった父親に自らを重ね、抵抗の身ぶりを譲り受けるかたちで始まったからだ。そして、キツネの脳裏にもまた、一揆に参加し、無力ながらも一度は闘った祖父の影が呼び覚まされる。

She talks about her samurai father's last stand, the Satsuma Rebellion. In the countryside, she says, there are peasant armies who protest "the blood tax," refuse to sow new crops. I nod with my eyes shut, watching my grandfather's hat floating through our fields in Gifu. (43)

しかし、キツネたちの闘いの難しさとは、たんに抵抗の精神を相続するだけでは不十分である点だろう。その証拠に、糸繰り作業を拒否することで搾取される関係を絶ち、精神的自由を

実践したとはいえ (“I’m escaping. He [the Agent] might still stop me. But I’ll do my best.” 43), ダイは結局死へと至る。この死の先例は、残された者たちに絶望を植えつけることになる。

It’s clear to us now that we can never leave this room—we can never be away from the Machine for more than five days. Unless we live here, where the Machine can extract the thread from our bodies at speeds no human had could match, the silk will build and build and kill us in the end. Dai’s experiment has taught us that.” (45)

もはや幹旋人や帝国という外部の力ではなく、内なる糸が、自らの身体が、女工たちを工場に拘束し、あやめる。ここに、支配するものと支配されるものが不可分であるがゆえの、女工たちのジレンマがある。自由を得るために戦う相手が、じつは自分の身体だというのだから。

しかし、自分自身と敵対させられているこの図式こそが、帝国が、幹旋人がしかけた最大の罠なのではないだろうか。いくら抵抗しようとも、この構造の内側にとどまるかぎり、女工たちは自滅してしまうだろう。ダイの闘いかたから教訓を読みとるとすれば、それは、「停止」することの危険性であると考えられる。ダイの行動は、彼女の言葉に頻出する“stop”の語が示唆するとおり、意思によってものごとを「止める」という原理にもとづいていた。

“And you’re right, Kitsune—we have to stop reeling. If we don’t, he’ll get every year of our futures. He’ll get our last breaths...” (43)

キツネの記憶をめぐるでも、ダイは回想を「やめる」べきだと主張する——“Stop poisoning yourself on the stairwell of Gifu. If I can stop reeling, surely you can, too.” (44)。事実、ダイは命とひきかえに、それを説こうとしたのだった (*Stop thinking about it. This was Dai’s final entreaty to me.* 45)。記憶を巻き戻すのを止める、労働を止める、食べること／生きることを止める。ストライキの性質が示すように、停止という一種の否定形を基礎としたダイの戦略は、帝国の支配システムに組みこまれることを拒否するという点では有効だろう。

しかし、ダイが自分の身体に殺されたように、この行為形態は自らとの闘争関係をひき起こし、生命体の循環をも分断してしまうのではないだろうか。現に、ダイがストライキの手本とした農民たちは、新たな蒔きつけを拒み、種まきから収穫、そして次の種まきへと一巡する農業の営みを断絶することで抵抗しようとした(43)。だが、それは、彼ら自身が生きるための食料を放棄し、自らの首を絞める行為でもあったはずだ。キツネの祖父の自殺が、命の継承者としての次世代を縛ってしまったのと同様に。そのめざすところが生や自由であったとしても、ある運動を力ずくで断つやりかたは、死しか生みださない。ならばキツネは、そこから学び、むしろ「動きつづける」ための適切な方法を探る必要がある。

4. 戻ることと進むこと

その鍵となるのは、ある力学を止めるのでも、それに流されるのでもなく、そのまま反転させることで利用する、「逆回転」であるように思われる。そのことは、ダイのストライキの間接的な契機となった、機械の故障による「逆回転」の事件に暗示されている。ある日、機械がキツネの糸を逆向きに巻き取る事故が起き、それを境に、キツネの糸が美しい緑色から真っ黒へと変色してしまったのだ (38)。この色が「間違った色」(the wrong color 39) と呼ばれるように、キツネはこのとき、蚕としては命を終えたともいえる (Soiled silk. Hideous. Useless for kimonos. 40)。ダイの取りくみは、糸の変化を自由意思の功罪と悩むキツネに反論するための、「挑戦」(She accepted my challenge 42) として始まったのだった。

こうしてレジスタンス運動への機運を生み出した「逆回転」の現象は、ダイの死後、キツネの本格的な抵抗を貫く原理としてあらわれてくる。そのひとつのヒントとなったのは、養蚕農家出身の仲間が教えてくれた本物の蚕の生態である。蚕は、繭のなかで歯と翅の生えた蛾へと成長するのだが、羽化の際に繭を食い破られまいと、農家は幼虫のうちに殺してしまう (46)。言い換えるならば、蚕女工たちが囚われている養蚕業とは、幼虫の成長過程を断ち切ることであったのだ (to stop them from undergoing transformation 46)。ある運動の「停止」が死につながるという観点からは、この発見により、キツネは偶然にも、自分たちの苦境の根源を見とおしたといえよう。ならば、“kaiko-joko” たちが生きながらえるには、その構造を逆転させ、繭を作ることで養蚕業の「切断」に抗って蚕の成長をうながしてやればいい。

ただし、この選択が、本来の望みとは逆に、恐れていたはずの「蚕変化」をむしろ進行させてしまうことに注目したい。女工たちの身体を支配している「変身」を逆手にとるためには、人間であることを手放し、本物の蚕になりきる必要があるのだ。事実、キツネたちは絹糸の生産量を倍増し、蚕としての働きを徹底することで、ひそかに「革命」を準備する。この逆向きを志向する態度は、過去との関係においても同様である。解放を求めるには、あやまちを犯した過去へと舞い戻ることが不可欠な条件となるのだから。繭を作る際、キツネは、あえて苦痛をともなう記憶を再生し、“the black thoughts” (46) を注ぎこむことで、望み通りの強度を備えた、漆黒の糸を作ることに成功するのである。

To do so, I have to keep forging my father's name in my mind, climbing those stairs, watching my mistake unfurl. I have to drink the toxic tea and feel it burn my throat, lie flat on the cot while my organs are remade by the Agent for the factory, thinking only, *Yes, I chose this*. When those memories send the fierce regret spiraling through me, I focus on my heartbeat, my throbbing palms. Fibers stiffen inside my fingers. Grow strong, I direct the thread. Go black. Lengthen. Stick. (47)

かつてダイは、キツネの後ろ向きの回想を「間違った方向」(Reeling in the wrong direction 41)だと懸念していた。後ろを振り返るのではなく、前へと過去を振り切って進むべきものだ、と。しかし、キツネの考えは違う——Still, I'm not convinced that you were right, Dai—that it's such a bad thing, a useless enterprise, to reel and reel out my memory at night. Some part of me, the human part of me, is kept alive by this, I think. (45)。キツネは、あえてあの唾棄すべき瞬間に立ち戻り、徹底的に後悔や怒り、やるせなさ、悔しさを反芻する。ただしそれは、たんに過去の「巻き戻し」というよりは、後悔を原料にして、過去を糸のかたちで現在に引きだし、未来を形づくるはずの繭へと織りこむ作業である。キツネが過去への「巡礼」(45)と呼ぶ記憶の再生 (relive) は、いまや自分を縛るためではなく、かつての選択の場へと自分を引きもどし、いわばもう一度選択するための生きなおし (relive) の行為ともいえよう。しかし、巡礼が奇跡や聖人たちをめぐるできごとを追体験することであるように、キツネの実践はむしろ、目を背けたい事実を刻みこむ、苦行ともいうべきものである。たんに直線的な未来志向とは異なり、忌むべきものを原動力に、後ろ／過去に戻ることが前／未来に進むことにつながる、という逆説がここに示されているのである。

5. 自分たちの名前とはなにか

生きのびるためには、変わらなくてはいけない。人間から虫の姿に、幼虫である蚕から繭に、そしてその中で変態を遂げた暁には、羽ばたく蛾に。女工たち全員を革命に引き入れ、繭を準備するキツネの態度には、すでに、人間としての生への未練を捨て、予測しえない変身のリスクをひき受ける覚悟がみえる。

Who knows what the world will look like to us if our strike succeeds? I believe we will emerge from it entirely new creatures. In truth there is no model for what will happen to us next. We'll have to wait and learn we've become when we get out. (49)

だが、キツネの決意とは裏腹に、やはりその行く末は絶望なのではないか、と考えるのは悲観的にすぎるだろうか。自由を得るためとはいえ、蛾への変身を全うするとしたら、そのとき人間としての本来の自分は生きているのだろうか。

それを知るヒントは、キツネたちの「名前」の果たす機能にあるように思われる。作品中、名前は、たんなる名称というよりは、口にすることによって存在を保存し、定義づけ、創りあげる、「予言」のような力を付与されてもいるからだ。自分とはなんなのか、を問うていた物語の冒頭、「もとの名前」をあっさりと捨て去った社会 (the world shedding names under the carriage wheels 33) とは対照的に、キツネや仲間たちが、出自を脚色しながらも、唯一、自ら

の名前を偽る様子はなかったことは注目に値する。女工たちの名前は、変らぬ一本の糸のように過去と現在をつなぎとめていた。キツネが病的なまでに署名の瞬間にこだわっていたのも、記入した名前＝自己の想起によって自らの存在を確認しなおすためでもあったのだろう。だから、レジスタンスが成功したとき、キツネは幹旋人に向かってふたたび名乗ることで、かつての自分を呼びだそうとする——I whisper my name to him, to see if I can jostle my old self loose from his memory: Kitsune Tajima, of Gifu Prefecture. (52)。

この自己の名前＝正体についての声明は、帝国からの「独立宣言」としても機能している。幹旋人と対決する最後のシーンで、キツネは帝国に奉仕する女工としての自分たちを、象徴的に放棄してみせるのである。

“Yes, they’ve all escaped, every one of them, all your *kaiko-joko*—”

Now my sisters drop down on their threads. They fall from the ceiling on whistling lines of silk, swinging into the light, and I feel as though I am dreaming— (50)

「あなたの蚕女工」は、もういない。ここにいるのは、団結した「私の姉妹たち」だ。この言葉は、フェミニズム的な女性解放のテーマを超えて、ひとりの人間の自由を宣言し、力強く誇らしげに響く。時代の動きによって期せずして「姉妹」のように結びつけられていた女工たちが、「帝国のための糸繰り」の行為を「自分たちのための糸繰り」へと反転させ、真の姉妹として自らを新たに定義し、出現させたのである。

それはまた、未来に向けた新しい「署名」の行為ともいえよう。「将来の労働者」(the future worker 35)としての行く末を規定し、帝国に自らを売り渡した、岐阜での署名を更新するために。これからの自分を予告的に名ざし、自由な存在として新たに形成しなおすために。そして、過去から受けとった自分の本質を、未来へと手渡し、生かすために。彼らはいまや、人間とは似ても似つかぬ容姿になり果てている (51)。しかし、かつてダイが語った「樹氷」のように、外見が様変わりしようとも、その内側では変わらぬものが生きつづけるのではないだろうか——“The snow monsters... are very beautiful. Their disguises make them beautiful. But they are still trees, you see, under all that frost.” (31)。そのことは、女工たちが変身のために準備した繭が暗示してもいる。キツネが繭に暗い過去の記憶を注ぎこんだのと同様に、すべての繭はそれぞれの過去からつくられた固有の色で染められている (the colors and seasons of their memories 49)。だとすれば、そのなかでおこなわれる蚕の変態 (transformation) が、現在の自分を未来の自分へと織りこみ、新たに創造するプロセスであることを、期待してもいいのではないだろうか。

こうした過去から未来へのつながりは、抵抗のしめくくりが、「循環」と「革命」が二重写しになった「回転運動」——幹旋人をとらえ、糸を巻きつけていく作業——であったことから読

みとれる (I spin around his chin and his cheekbones, his lips. To get over his mustache requires several revolutions. 52)。停止による抵抗から逆回転による抵抗へ、「蚕変化」による束縛から変身による自由の獲得へ。いまや、糸繰りのイメージは、キツネたちの支配ではなく、幹旋人の運命を決する力へと変化し、不可抗力に思えたものごとの回転 (revolution) を、自分たちの自由を勝ちえる「革命」(revolution) に反転させた地点を映しだしている。無力ながら歴史に抗って敗れ去った先人たち、抵抗に命を捧げたダイ、キツネの選択、故郷の思い出。それらすべての要素とのつながりが、未来に進むために過去に戻るという運動を経て、色とりどりの糸となり、楕円形の繭の縁にぐるぐると巻きあげられる (I continue reeling upward 51)。

物語の最後は、名前の「一周」と繭の口を閉じる糸の「回転」でしめくくられる。

Kitsune Tajima, of Gifu Prefecture.

Nothing.

So then I continues reeling upward, naming the workers of Nowhere Mill all the while: “Nishi. Yoshi. Yuna. Uki. Etsuyo. Gin. Hoshi. Raku. Chiyoko. Mitsuko. Tsaiko. Tooka. Dai.

“Kitsune,” I repeat, closing the circle. The last thing I see before shutting his eyes is the reflection of my shining new face. (52)

自分たちの名前＝正体とはなにか。署名するように、記録するように、そして将来への宣言のように、キツネは仲間たち全員の名前をリストアップしてみせる。「キツネ」からはじまって、また「キツネ」へ。一巡した名前の環 (circle) によって、女工たちはそれぞれの繭のなかで、自分の核となるものを変身が完了するその日へと引き継いでいくのである。

6. 結

悔やまれる過去を背負いながら、いかに生きるか。蚕でも人間でもない新たな自分として生まれ変わろうとする振る舞いをつうじ、ラッセルはフェミニスト小説の枠には収まりきれない、より普遍的な問題を見とおしている。現代作家らしく、ラッセルが描くのは、支配－被支配の二項対立や自由意思の絶対性といった固定的な図式ではなく、支配者と被支配者が互いに加担し依存するような、堂々めぐりの関係である。そこから脱するために編みだされるのは、「糸繰り」を逆回転させるように、過去へ戻ることをつうじて未来へ進む、という行動原理である。そして、たった一度の選択がすべてを決する、という決定論的な思いこみに対しても、ラッセルは、過去－現在－未来を、本能と意思を、一本の糸に織りこんで原動力とし、つねに変化しつつ運命を動かしていく方法を提案している。

こうしてみると、「後悔の吐き気さえ、なんらかの使い道がある」(48)と記したラッセルは、楽観主義的な作家であるようにも思われる。しかし、それが単純な前向きさではないことは、オープンエンディングでしめくくられた物語の形式から窺われる。女工たちは翅と歯を手に入れ、飛び回ることができたのか？ 工場からは脱出できたのか？ 人間と虫のあいこのは生き延びられるのか？ それは誰にもわからない。つねに現在形のキツネの語りが映しだすのは、いまだ結末を経験していないために「いま」しか語れない、先の見えなさそのものだからだ。しかし、たとえ物理的な自由が得られなかったとしても、「独立宣言」や「未来への署名」、「革命」の成功が示すように、彼らは精神的な解放をすでに獲得している、と考えることができるように思う。先例のない未知の可能性に踏みだすこと、それはたしかに恐ろしい。それでも、キツネは言う——「次にどうなるのか、手本などない。ただ待つて、出てきたときはじめて、自分が何になったのかがわかるのだ」。その緊張感と期待感を共有した読者もまた、誰にも知りえない未来に向かって飛びこむ、一種の「賭け」へと誘われているのだろう。

(いしかわ まりあ・言語文学専攻)

注

1. 英語の引用箇所は Russell, Karen. "Reeling for the Empire." *Vampires in the Lemon Grove and Other Stories*. NY: Random House, 2013. Print. から。日本語訳は、ラッセル、カレン。「帝国のための糸繰り」『文芸春秋』8月号、藤井光訳、2013, Print. を参考としつつ、適宜変更をくわえた。
2. Russell 作品の奇想的な不気味さはとくに注目を集めており、Williams は "uncanny" や "first-rate, elegant horror" を特徴として挙げている。また、藤井が「『現代アメリカ発、カフカ経由、明治日本着』とでも言うべき独特の世界観」(101)と分類を試み、Boyle が "Karen Russell is like some weird, perfect blend of singer-songwriter Neko Case and Studio Ghibli mastermind Hayao Miyazaki. . . And she's not tied down to any genre." と評するとおり、Russell の作風には、「～と～の混合」と描写せざるを得ないような、ひと言では定義しにくい複雑な独創性がみられる。
3. 「女性による人生の主体的選択」の主題に着目した例として、たとえば藤井 (101)。
4. Russell 自身、Henderson によるインタビューにおいて、"I've been really enjoying experimenting with fantastical-historical fiction, magical-historical alternate histories" と述べ、事実と幻想を結合させることで、"something unresolved in the past that is "haunting" the present" という主題を扱おうとしていたという。
5. もっとも、これを家族、とくに男性の負債を肩代わりする「犠牲」としての女性、という単純な対立関係で考えることはできない。キツネの "My afterlife will be whatever he chooses to do with the money." (40) という言葉が示すように、社会変革や死の力に翻弄される無力さにおいて、自殺した祖父と、体内に「死の種」(34) の入った父、そして娘はいわば運命共同体にある。そして、女工たちが明治日本の急激な社会変化と連動しているように (All Japan is undergoing a transformation—we *kaiko-joko* are not alone in that respect 33)、祖父の選択の背景にもまた、国家の転換点という歴史の力——具体的には、地租改正のあおり——が働いている (In the first decade of the Meiji government, my grandfather was forced into bankruptcy by the land tax. 33)。

参考文献

- Boyle, William. "What True Flight Will Feel Like: On Karen Russell's 'Vampires in the Lemon Grove'." *Los Angeles Review of Books*. Los Angeles Review of Books, 15 Feb. 2013. Web. 31 Aug 2015.
- Russell, Karen. "Reeling for the Empire." *Vampires in the Lemon Grove and Other Stories*. NY: Random House, 2013. Print.
- Henderson, Mason. "Karen Russell on the Fantastic World of *Vampires in the Lemon Grove* (Interview Series, the Poetry and Literature Center at the Library of Congress)." *The Library of Congress*. The Library of Congress, n.d. Web. 31 Aug 2015.
- Williams, Joy. "The New Uncanny: 'Vampires in the Lemon Grove,' by Karen Russell." *The New York Times*. The New York Times, 7 Feb. 2013. Web. 3. Sep. 2015.
- ラッセル, カレン. 「帝国のための糸繰り」『文芸春秋』8月号, 藤井光訳, 2013, Print.